

## 教員の視座による遠隔授業

青嶋由美子

佐野真一郎・岡本雅子・井中あけみ・杉山和恵  
朝元 尊・加藤克俊・熊谷享子・葛谷潔昭

### I. はじめに

2020年4月7日に新型インフルエンザ等対策特別措置法（改正法公布日2020年3月13日・施行日3月14日）に基づき埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県、福岡県の7都府県を対象に4月7日～5月6日の1カ月間を期間として緊急事態宣言が発出された。この特措法には「当該特定都道府県知事が定める期間及び区域において、生活の維持に必要な場合を除きみだりに当該者の居宅又はこれに相当する場所から外出しないことその他の新型インフルエンザ等の感染の防止に必要な協力を要請することができる」とある。4月16日、緊急事態宣言の対象は全国に拡大した。また、当初から対象であった7府県に加え、本学が所在する愛知県、北海道、茨城県、石川県、岐阜県、京都府の13都道府県が「特定警戒都道府県」に位置付けられた。このような状況から、学生が出勤して受講する従来の「対面授業」の実施は困難となり、遠隔（オンライン）授業の実施が必然となった。本稿は、遠隔（オンライン）授業を初めて実施した幼児教育・保育科の教員達の振り返りをまとめ、今回の経験を今後に生かすための指針とすることを目的としてこの1年間を総括するものである。

### II. 遠隔授業実施の経緯

2020年2月27日、総理大臣官邸で開催された第15回新型コロナウイルス感染症対策本部での席上、当時の安倍晋三首相は「何よりも、子どもたちの健康・安全を第一に考え、多くの子どもたちや教職員が、日常的に長時間集まることによる感染リスクにあらかじめ備える観点から、全国全ての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校について、来週3月2日から春休みまで、臨時休業を行うよう要請します」と発言し、全国の学校が突然の休校を迎えることとなった。そして、これがこれまでの教育現場で通用してきた「対面形式の（面接）授業」の大きな転換点となった。

本学でも、2020年2月27日には例年通りの学位授与式は実施せず、分散型で行う旨が伝達された。しかし、状況の変化から、3月6日、3月18日に予定されていた学位授与式の全面中止が決まった。教育現場で、年度最後の大きな行事が失われ、教育そのものへの不安感が募る中で新年度を迎えることとなった。

新年度の行事である入学式は4月1日に分散型で時間を短縮して実施したが、翌日予定さ

れていた新入生ガイダンスの実施は見送りとなった。通学バスの混雑緩和のための時間割の変更、授業時間の短縮、3密を避けて過ごすための昼休みの延長等が対策として伝達された。授業開始は4月20日からとなっていたが、COVID-19の感染拡大の状況を鑑み、4月27日より遠隔授業にて実施と決定された。

遠隔授業実施のための実質的な準備は、4月13日付教務委員会発信・件名「遠隔授業支援システムの操作説明会実施について」のメールによって始まった。これ以前に、ネットワーク管理委員会委員長・山口満氏（所属：豊橋創造大学経営学部）が、4月3日に「Classroomワークショップ」を開催していたが、遠隔授業実施が確定した後の説明会はこのメールによって案内がなされた。「Google Classroom」「Google Hangout Meet」説明会参加の意向を問うアンケート調査が行われ、4月14・15日の両日に専任教員・事務職員向けの説明会が開催された。説明者は山口氏、システム管理室・桐木道彦氏、教務課・紅林英彦氏であった。この説明会には、教員だけでなく事務職員も参加し遠隔授業支援システムへの理解と経験を深めた。参加した事務職員は、非常勤講師向けの説明会（4月21日、23日実施）・遠隔授業開始後の授業内でのサポート役を務めてくれている。

山口氏は「Google Classroom講座 基本的な使い方」をClassroomとして運営し、説明会開催以前から、Classroomの利用法を丁寧に動画付きで発信を重ねてくれた。内容的には、「クラスの作成方法」から「クラスの削除方法」、具体的な質問設定への有益な示唆、教員サイドと学生サイドで提示した資料や課題がどのように見えるか等であった。説明会後には、「遠隔授業支援システム利用手順書（基本編）・（実践編）・（フォーム利用編）」、課題のサンプル提示等がアップされた。また、山口氏の発信内容は教務課にて印刷冊子として準備され、希望する教員が紙媒体として利用出来る形式が整えられた。これらの情報は、遠隔授業を初めて体験する教員にとって非常に有難いものであった。

この説明会后、幼児教育・保育科の教員同士で、遠隔授業開始前、教室と研究室・教室と教室との間で、パソコンを通しての授業がどのように見えるのか聞こえるのかの確認を何度も行った。また、パソコンの操作に精通している教員が講師役となり、授業資料の作成方法・提示方法等についても、学習会を重ねた。さらに、遠隔授業システムの使用法について、「マスター音量の変更について」「パワーポイントをMeetで表示するときの技」「Google Classroomから、Meetへ参加できるようにする設定」等の件名で盛んに情報発信がされ、科の教員全員で情報を共有することが出来た。

学生サイドには、遠隔授業環境確認テストを4月16日・17日に行った。このテストで問題が生じた学生に対して4月20～23日学内説明会を開催した。また、科独自に、どのツールを用いて遠隔授業を受講するかの調査も実施した。学生サイドの受講環境に問題がない点を共通認識として、遠隔授業開始日を待った。ただし、この確認はあくまで受講環境に関してであり、受講する学生達のメンタル面への考慮は行えていなかった。2年生は既に友人関係が出来上がっているため、何か問題が生じた場合も相談が出来る。だが、新入生で遠隔地から入学し、まだ友人がいない状況の学生にとっては、非常に心細かっただろうし、精神面でのフォローの体制が甘かったように感じている。当初は教員サイドも初めての体験に右往左往

しており、そのような新入生の心情に思い至らなかったのであるが、後の様々な報道により新入生の困難な状況を知るにつけ、今後の反省とすべき点だと感じている。

2020年4月27日、幼児教育・保育科の全ての講義が遠隔授業として開講された。緊急事態宣言が解除された後の6月1日に、一部を遠隔授業として残すものの対面授業も開始された。1年生は木曜日のみ遠隔授業を実施し、2年生は全ての授業が対面授業となった。7月1日からは、全ての授業が対面式となったが、定期試験目前にして7月27日から、感染拡大を受け、一部遠隔授業に戻った。この時は、1年生の木曜日のみ遠隔授業日となった。

秋学期は、1年生については木曜日のみ遠隔授業で実施しており、これは秋学期開始時から続いた。2年生は、当初は月曜日・水曜日・金曜日を遠隔授業日として設定した。また、感染拡大の状況が好転したことにより、11月2日より、2年生の遠隔授業日は月曜日のみとなった。

### Ⅲ. 専任教員へのアンケート調査結果と分析

遠隔（オンライン）授業について、幼児教育・保育科専任教員がどのように受け止めてきたか、アンケートを実施してまとめた。

まず、遠隔授業を実施し全体的な印象を「満足度」という語を用いて回答をまとめた。

設問1「遠隔授業を実施してきて、全体としての「満足度」を5段階（満足・やや満足・普通・やや不満・不満・その他）で評価してください」について、「やや満足」33.3%、「普通」33.3%、「やや不満」33.3%となった。特段の満足や不満はないが、それぞれに思うところはあるという結果である。

次に遠隔授業を行ってみて、学生の「理解度」をどのように判定したかについて振り返りを行ってみた。

設問2「遠隔授業を実施してきて、全体として「学生の理解度」を5段階（よく理解出来ていた・だいたい理解出来ていた・普通・あまり理解出来ていなかった・まったく理解出来なかった・その他）で評価して下さい」について、「だいたい理解出来ていた」22.2%、「普通」66.7%、「その他」11.1%という結果を得た。多くの教員が、対面授業であっても遠隔授業であっても、授業で要求している内容を学生がそれなりに理解したという判断を下している。「その他」については、「上位層と下位層の2極化が広がったと感じた」とする回答があった。これは、遠隔授業の際に問題となる「受講する側が自らどれくらい学習していけるのか」とリンクする指摘である。

さらに、設問3では「遠隔授業を実施してきて、よかったことを教えてください」と、遠隔授業に関してメリットと受け止めた点があるかどうかを確認してみた。

「課題の管理が行いやすかった」との回答が77.8%となっている。本学ではGoogle Classroomを用いていたのだが、このアプリを利用すると、課題の提出状況や提出物そのものの管理が容易に行える。課題が提出してあるか未提出なのかは一目瞭然である。「履修者（学生）の欠席が少なかった」44.4%というのも目立っている。学生にとっては通学に要する時間が不要となり、通学している場合であれば遅刻になってしまうような状況であっても、

授業開始には十分間に合うということがあったであろう。また、体調に不安がある場合でも、受講出来る環境を作ることが出来る。その他の選択肢では、「学生への指示・授業運営が円滑にできた」22.2%、「複数回分の授業をまとめて準備することができた」22.2%となっている。「学生とのコミュニケーションが取りやすかった」「履修者（学生）同士もコミュニケーションが取りやすかった」「履修者（学生）が積極的に授業に参加した」「対面授業より履修者（学生）の学修効果が高かった」を選択した教員はいなかった。

「その他」として、「対面では発言、質問をあまりしない学生が、チャットなら回答したこと」「欠席した学生に授業の録画を見せることができた」「造形の課題では他人に影響されることなく、独自のセンスで作り上げる学生もいた。こだわりが出やすい」「通学と対面授業に伴う感染リスクが回避できた」「学生が体調に関わらず授業に出席できた」「学生が質問し易く、また、それに対し教員がすぐに返答することができた」といったコメントがあげられている。

設問4は「遠隔授業を実施してきて、困ったこと・大変だったことを選んで下さい」といった内容で、遠隔授業を実施する上での教員が感じる問題・課題の洗い出しを行った。

「遠隔授業開始までの準備期間が短かった」「学生の反応が分かりにくく、授業の内容が十分伝わっているか不安に感じた」の二項目については88.9%となっている。前者については、「I. 遠隔授業実施の概要」でも述べた通り、遠隔授業実施の決定・遠隔授業実施のための講習会開催から実施までの期間が短かったことから当然の感想だと言える。後者については、Google Meetを利用して、学生の受講している姿を映してもらっていても、授業を実施している側としてはその実際の状況を捉えることは難しい。カメラをオンにしてもらっていても、その実態は把握出来ないのである。筆者が学生を指名して答えてもらう場合、質問を明らかに聞いていない者が目立った。オンデマンド型ではなく、同時双方向型遠隔授業の実施であっても、学生の受講態度に不安は残るのが実情であろう。次に多かったのが、「対面授業より準備が大変だった」77.8%である。これまでの対面型授業を実施してきた中で、板書をメインに授業を運営してきた教員も居る。パソコンを通して利用するタイプの授業資料を用いてこなかった教員の場合は、パワーポイントの作成から始める必要があった。またパワーポイントを利用してきた教員であっても、安定した状況で学生に資料を見せたい場合は、音声説明を含む動画を制作して視聴させる場合もあった。いずれの場合も、これまでの授業資料では遠隔授業に対応出来ず、資料作成のために多くの時間を費やすこととなった。また、課題についても、対面授業内で一部確認が出来ていた内容も全てを講義時間外に行うこととなり、この点でもこれまでよりも多くの時間が必要となった。「履修者（学生）同士のコミュニケーションが取りにくかった」という選択肢も66.7%と目立っている。学生同士のマイクをオンにして会話をしてもらったり、チャット上で意見を交わしたりという利用法は、従来の対面授業に慣れた教員では、当初はなかなか行えなかったのではないだろうか。2020年10月からMEETに「ブレイクアウト セッション」の機能が備わり、学生をグループ分けしてディスカッションさせるということが容易に行えるようになっており、今後はこの点については改善される筈である。今後とも難しい課題となると思われるのが「授業に遅刻

する学生の申告内容が妥当かどうか判断出来なかった（MEETに入れない、Wi-Fiに接続出来ない等）」という選択肢であり、55.6%となっている。このような場合、即座に教務課に連絡をするように指導してあったが、それが行われていない場合も数多くあった。大学の方針として、学生の申し出はそのまま受け入れるというものであったが、授業が進むにつれて、疑義が持たれる学生の存在も浮かび上がってきており、判断し難い面が残っている。

「学生とのコミュニケーションが取りにくかった」44.4%については、MEETを使い始めた当初は、学生にマイクをオンにしてもらうタイミング、チャットで意見を述べてもらう働きかけ等、教員サイドでのアクションが上手く取られていなかったと思われる。当然、対面授業のように直接受講者と接してアイコンタクトを取る、表情から訴えてくる内容を読み取って授業を進めるということが出来なかった。また、「学生が自分で課題をやったかどうかを見極めるのが難しかった」44.4%という点もある。目の前で課題をやってもらっているわけではないため、学生が独力で課題を行っているかどうかの判断が難しい。「自分で」という箇所の観点を変えると、所謂「コピペ」で課題を作成しているのではないかという問題もある。こちらは、Google Classroomを提出先としていれば、Webコンテンツの不適切な引用については「独自性レポート」の機能を利用すると、チェックが行いやすい。その他の選択肢については、「パソコンやClassroom, MEETの操作が難しかった」22.2%、「学生への指示・授業運営が円滑にできなかった」11.1%、「ネットワークが一時的にストップして、課題の授受や授業の運営に支障があった」11.1%となっており、「定期試験ができなかった」「授業配信する環境（場所）に不具合があった」を選択した教員は居なかった。

その他として、「Meetには入っているものの、学生が授業時間を通して授業に参加しているのか、見極めるのが難しかった」「ほかの教員も含めて課題が多くなったようで、学生が大変そうだった」「遅刻だけでなく、中抜け、無反応、課題の提出遅れに関しても、システムの不具合が理由であると、認めざるを得ないこと」「実技に関して、PCの位置によって、または自宅の環境によって、動くスペースを確保できず、全身を映すことのできない学生が多数いる」「学生の動きを見るためにカメラをオンにさせると、受講者の半数に限定しても一定数の学生は送受信に不具合があった」「対面であれば一斉に行うことが半数に限定することで倍の時間を要し、活動を削減せざるを得なかった」「動きも音も、昔の衛星放送のようにタイムラグが生じ、指示通りにできているのかどうか、アバウトにしかわからなかった」「（今はできるようですが）グループワークができなかった」「映像の共有の際、ソフトの特性と、教員側のパソコンの性能、学生側のネット環境が原因で、映像が切れたり、カクカクとした動きになったりするため、スムーズに見ることができないと学生から言われた」等が寄せられた。特に、対面双方向型で授業を実施する場合、送信側である教員サイドが環境を整えていても、受信側である学生サイドの環境によって受講の質が変わってしまっている点への言及が多い。

設問5では、どのような科目が遠隔授業に向いていると考えるかを問うた。今後、遠隔授業を実施しなくてはならない場合、遠隔授業実施日に望ましい授業の組み合わせを考慮する際のヒントとなるからである。設問項目は「対面授業」と比較してどのような科目がオンラ

イン授業に適していると思いますか」である。

結果は、「一般教養科目（講義系）」88.9% 「専門科目（講義系）」77.8% 「セミナー系科目」11.1%、「学科の特性から、遠隔授業に適している科目は無い」11.1%であった。「一般教養科目（実技系）」「体育実技」「専門科目（講義+実技・演習系）」「専門科目（実技系）」「実習指導に関わる科目」を選択した教員は居なかった。当然のことであるが、実習・実技を伴う科目は、遠隔授業で実施しても教育的効果は低いと判断されている。

設問6は「オンライン授業に関連して学生から多かった問い合わせ内容を教えてください」として、学生サイドから不足していると感じた点は何だったのかを探ってみた。「システムに関すること」が55.5%であったが、この問い合わせには、すぐに対応出来た教員とそうでなかった教員とに分かれたと思われる。次に多かったのが「課題の提出期限」「課題の提出場所」33.3%であった。こちらは受講する側が授業に正しく参加していなかった可能性も否めない。「出欠の取り扱い」については33.3%であった。定刻までにGoogle Classroomに入室していなかった場合が想定される。「授業の内容」については22.2%で、この問合せはもっと増えても良いように思われる。「課題の内容」「評価の方法」では其々11.1%、また、「課題の量」「テキストに関すること」は0%であった。学生からの問い合わせが無かった教員は1名である。また、問い合わせの多かったその他の項目として「課題の提出方法（スマホのみの学生）」という回答があった。

最後の設問は、設問7「今後も遠隔授業を実施したいですか」である。今回、COVID-19感染予防対策の一つとして実施に至った遠隔授業を実施してみて、教員は「遠隔授業」をどのように受け止めたかを振り返る設題となっている。これについては5段階で回答を寄せてもらったのであるが、「あまりしたくない」44.4%、「したくない」11.1%と否定的な見解が半数を超える結果となった。「ややしたい」33.3%、「したいともしたくないとも思わない」11.1%、「したい」0%となっている。初めて経験した遠隔授業では、各人メリット・デメリットを感じており、それを清算した結果として選択された回答だと思われる。

#### IV. 2020年度遠隔授業の振り返り

幼児教育・保育科の専任教員全員が、遠隔授業の振り返りを行った。基本的に、春学期・秋学期1科目ずつを選択し、遠隔授業を実施してみて「対面授業と違うと感じた点（プラス面）」「対面授業と違うと感じた点（マイナス面）」「対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等」「今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等」について纏めてある。掲載順は幼児教育・保育科の科目ナンバリングに拠る。

科目名：保育内容総論	開講時期	春学期	遠隔授業実施回数	5回
<b>授業形態</b> 講義				
<b>対面授業と違うと感じた点（プラス面）</b> オンライン上では、初対面の教員であっても、学生にとって質問し易く、また、それへの回答がすぐに得られることは、学生にとって心強く感じられたのではないと思う。また、授業の感想を述べることで、学生にとって授業の内容が印象に残り、その日の内容の振り返りになっていたのではないか。教員にとっても、学生から授業の感想がすぐに得られることは、学生に授業がどのように受け止められていたのか、理解されたのかを知る上で役に立った。				
<b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b> 最も苦労した点は、授業中の学生の反応がわからないことである。そのため、説明不足なのか、説明し過ぎていいのか、判断できず、授業の進め方に苦慮した。結局、相手の反応がわからないまま、あらかじめ用意していた内容を進めることになり、学生のその場での理解度に即した授業内容になっていなかったのではないか。授業が終わってから学生の理解が充分でないことが判明する場合、個別の対応はすぐにできても、全体への対応はリアルタイムではなく、次の授業時以降になってしまう。また、感想からのみで全ての学生の理解度を推測することは難しい。				
<b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b> その日の授業の目標をパワーポイントで最初に提示して明らかにし、授業の最後にもそれを確認し、授業毎のポイントを分かり易くして印象に残るように心掛けた。また、授業後、自主学習で確認、復習ができるように、パワーポイントを毎回クラスルームにアップした。さらに、毎回、前回の授業の内容を簡単に復習し、授業の流れが掴めるように、また、内容の理解が定着するように努めた。学生の提出した課題にはコメントを付けて返却し、できるだけ双方向のコミュニケーションが図られるようにした。				
<b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b> 1. 課題の出し方を再考したい。 課題は、印刷物として配布すると共に、クラスルームにワードファイルで提示した。提出方法としては、印刷されたプリントに書き込み写真を撮って提出する学生と、データ上で書き込み提出する学生の両方がいた。ワードファイル以外の例えば「フォーム」を使用するなど、課題のフォーマットについて検討し、学生と教員双方にとって使いやすい方法を選んでいきたい。 2. よりよい視聴覚教材の使用を検討したい。 理論と実践が結びつくように、保育現場のビデオ等もよりよいものを選んでいきたい。 3. 双方向（学生と教員及び学生同士）の要素を増やす。 学生と教員の間での課題を通した文章でのやり取りのみでなく、授業中に学生の発言の機会を設け、学生同士のコミュニケーションも図りたい。ただ、他学生の音声聞き取りにくいなどの技術的な問題はあある。				

科目名 保育内容・環境	開講時期 春学期	遠隔授業実施回数	5回
<b>授業形態</b> 講義形式が基本だが、授業内で演習を入れることがある			
<b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b> 1年生の初めから各自で勉強に取り組まないといけないため、友達関係も構築できないまま自力で頑張るために授業にしっかりと取り組もうとする姿勢が続いた。対面だと周囲の友達の取り組みの様子に影響を受け、手を抜いてしまったり、後で誰かに聞けばいいと思い集中しなかったりする場面がみられる。 ※精神疾患を患っている学生にとっては、ずっと遠隔でやってほしいという意見もあった。 ただ、保育という職業の性質上、それは無理である。			
<b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b> 遠隔も対面もプリントに書き込んで提出をさせていた。対面授業では各自の書いている内容を確認しながら次に進み、何か問題の意図が通じていないような部分に関してはすぐに補足説明ができたが、遠隔ではすべて書き込んだものを授業後に提出させるため、チェックと指摘が大変な作業となった。また、学生も教員が机間巡視の際に、近くにきたタイミングの方が質問しやすいようであった。 また、プラス面では各自が自分なりに頑張ることが続くと書いたが、一部ではこのぐらいで構わないだろうという独自の解釈が、他の学生と乖離していき、そのまま単位を落とすケースもあった。			
<b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b> 遠隔授業に際して、対面授業同様にプリントに記入して写真で提出する方式で行うため、プリント類をすべて郵送した。封入のミスがあった場合のため、自分でも印刷できるようPDF資料を毎回揚げていたが、学生たちはそれをダウンロードし、自宅でプリントアウト、またはコンビニでプリントアウトする方法を知らなかった。			
<b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b> 幸いにも封入ミスはなかったが、PDF資料のダウンロードと、プリントアウトの仕方を覚えさせないことには、資料が足りない時に、毎回自宅への郵送が必要になってしまう。もちろんGoogleドキュメントや、フォームなどを使った課題の出し方もあるが、図を描かせたり、罫線の無い紙にある事柄について見やすくまとめたりするといった課題は、紙に書かせた方が良い。スマホの普及率はほぼ100%といってもよいだろう。携帯から資料をダウンロードしてコンビニでプリントアウトするということを、もっと普通にできるよう講習をしてはどうか。クラスルームの資料にはPDFのデータとともに「携帯から印刷」で検索するよう促した。			

科目名 保育原理	開講時期	秋学期	遠隔授業実施回数	15回
<p>授業形態 講義</p>				
<p><b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b>                      教育原理同様に、Classroom を利用することによって、教材、資料、小テスト等を Chapter に分けて、オンライン上に保存ができ、授業の構成を教師はもとより、学生が「振り返り」やすいと感じた。個別の質問に対応できた。                      また、課題を出すことによって、授業の事前事後学習が増え、単位の実質化が図れたと思う。</p>				
<p><b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b>                      教育原理同様に、空間で「見える」授業態度というものが、カメラを通してだとなかなか感じるができなかった。                      真面目な学生は、真剣に取り組んだことによって学力の向上は図れたと思うが、不真面目に取り組む学生は、カメラをオフにし、実際は何も行わないことで、学力が低下すると感じる。したがって、対面以上に、学力の二極化が危ぶまれる。</p>				
<p><b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b>                      講義形式なので、こちらが一方的に話すだけにならない様に、双方向性を意識した授業展開を心掛けた。                      個々の学生の空間で得られる非言語情報が全く得られないため、時々質問することによって、緊張感を抱かせるようにした。</p>				
<p><b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b>                      とにかく、15分×6セットあたりの構成で、授業を作る必要性を感じる。話す、聞く、考えさせる、をその中に散りばめて行う。最近の学生は、動画等は見慣れているので、とにかくショートスパンで、楽しく、かつ情報量をしっかり入れて行くことが重要。</p>				

科目名	カリキュラム論	開講時期	秋学期	遠隔授業実施回数	15回
授業形態	講義				
<b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b>					
<p>授業を通して常に話している人が一人であるため、教員のみでなく、学生が発言、音読している時も、全員が集中して発言者に耳を傾けることができる。対面授業では、どうしても私語があったり、距離があったりで、話している学生の声が聞きにくいことがあり、発言に集中できずに授業の一体感が損なわれる。大勢の前では発言しにくい学生も、マイクを通しての方が、発言し易いかもしれない。また、視覚的にもスライドの画面一点に注目することにより、今、授業で何をやっているのか、授業の内容と流れが掴み易いと考えられる。</p>					
<b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b>					
<p>基本的に学生の自主性に任される授業形態であるため、問題なく学習できる学生とさぼってしまう学生との差が生じ、それが授業期間を通して広がり、最終的に習得できるものすなわち学修の効果にばらつきができる。</p> <p>対面であれば、問題のある学生に授業内で直接指導もできるが、遠隔の場合それが難しく、結果として落ちこぼれてしまう学生が発生する。とくに、対面と併用でなく全面的に遠隔の場合は（今学期はそうではないが）、学生指導が困難になる。</p>					
<b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b>					
<p>紙ベースの資料と課題を使用したため、それらを綴じる授業専用のファイル（フラットファイル）を作り、授業時は常にそのファイルを使用することにし、資料や課題がばらばらにならないようにした。課題のチェックと資料配布のため、合計4回ファイルの回収を行ったが、回収と返却のタイミングを決めるのが難しかった。また、返却前に新しい資料をファイルに綴じる時、全員もれのないように気を付けた。今回は、対面授業日があり、ファイルの回収と返却が可能であったため、このような形をとった。</p>					
<b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b>					
<p>授業用資料等について：配布資料とパワーポイントの両方を使用しているため、授業内で今、どこに注目すべきかをより明らかにする必要がある。また、資料のどこを説明しているのかを分かり易くするために、資料自体を画面に写したりする必要もあるかもしれない。今回は課題を全て紙ベースで作成したが、クラスルームの機能を活用することも今後検討していきたい。</p> <p>学生への指導について：学生の視野を広げ、学生同士のコミュニケーションが図られるように、授業内での学生の発言・発表の機会を増やしたい。また、落ちこぼれる学生が生じないように、できるだけ全学生への目配りと指導を心掛けたい。</p>					

科目名 教育原理	開講時期 春学期	遠隔授業実施回数 9回
授業形態 講義		
<p><b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b>                      Classroom を利用することによって、教材、資料、小テスト等を Chapter に分けて、オンライン上に保存ができ、授業の構成を教師はもとより、学生が「振り返り」やすいと感じた。個別に、問い合わせに対応できた。</p>		
<p><b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b>                      空間で「見える」授業態度というものが、カメラを通してだとなかなか感じることができなかった。</p>		
<p><b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b>                      講義形式なので、こちらが一方向的に話すだけにならない様に、双方向性を意識した授業展開を心掛けた。</p>		
<p><b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b>                      とにかく、15分×6セットあたりの構成で、授業を作る必要性を感じる。話す、聞く、考えさせる、をその中に散りばめて。</p>		

科目名 社会福祉 <1年>	開講時期 秋学期	遠隔授業実施回数 15回(13回終了)
授業形態 講義		
<p><b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b>                      春学期で慣れており、入室がスムーズに行えている。授業中にやり取りを直接求めず、教科書や資料の提示をしながら行っているためか、オンライン授業を望む学生も数人いる。</p>		
<p><b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b>                      学生の表情、リアクションがわからない。質問を出した学生に顔出しを求めたところ一瞬だけ顔を出したがすぐに閉じる学生がいた。毎回数名1～2分遅刻傾向の学生もあり、オンライン環境の不十分さを理由に挙げている。ビデオの放映の際、動きがカクカクになり、音声と画像のズレがあるといった課題があった。</p>		
<p><b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b>                      教科書、プリント等の資料を提示し、その画像の上からメモを記入し提示するという PC ならではの工夫ができています。毎回感想文の提出を求めるとともに、リアルタイムでチャット（質問、意見）の記入を求めている。</p>		
<p><b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b>                      引き続き資料等の提示をしつつ上から記入する、チャットの活用をしながら授業を行ってきたい。ビデオを放映する際のカクカクな動きについては、配信技術の向上を期待したい。それまでしばらくはオンデマンドとの併用を行っていくつもりだが、著作権の関係で配信が難しい場合があり今後の改善が望まれる。</p>		

科目名 特別支援教育・保育 I	開講時期 春学期	遠隔授業実施回数	10 回
<b>授業形態</b> 講義 + 演習			
<b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b> 学生に意見を求め、それに回答させる時や、学生から言いたいことがあった時にはチャットですぐやり取りできる点。声を出して意見を述べるよりも、学生はハードルが低そうだった。 Classroom と連動させて取り組めたため、classroom で課題を行ってから授業に入ったり、最後にclassroom で課題をやらせることができた。提出状況が分かりやすく、すぐに提出した内容がこちらでも確認できるため、添削もしやすかった。 テスト形式にした際には、点数の分布もすぐに図として確認することが出来た点も便利だった。 Meet での授業内容を録画しておき、欠席した学生に後で見せることができるのは、欠席した学生の学びの保障として有効である。			
<b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b> 学生の反応が分からないため、講義の時など特に一方的に話すことになり、興味をもって聞いてくれているのか対面よりもかなり不安が残る。 課題の提出方法が手探り状態だったため、最初の方はこちらの添削内容を学生が見る事が出来なかったり、学生自身が自分で提出した内容を確認できないことに私が気づけなかったりしたため、教員側のアプリの習熟が不可欠である。			
<b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b> 授業後の課題を考える必要があり、それは工夫して行った。対面時には課題を行っていなかった単元でも、授業内容の理解度について課題をやらせることで測ることができた。 画面上でもみやすいスライドの色などを工夫した。 どうしても通常よりもやるが多いため、実際の授業時間が短くなり、内容を精査して要点を伝えられるように取り組んだ。 授業内容には直接関係ないが、meet に入れない学生を確認するために、まずは classroom のコメント欄に学番を入力させてからリンクを貼ってある meet に入室するようにした。 Classroom で行う課題内容を工夫した。画像を貼り付けて間違い探しのような課題も行うなど、取り組みやすい課題も取り入れるようにした。 スライドの内容を穴あきにした資料を渡しておき、スライドの説明を聞きながら穴埋めをする方式であったため、学生によっては、時間内に書き込めないこともあった。このため、授業中使用したスライドは classroom にアップするようにした。学生は書けなかったら後から見直せばいいという安心感があり、比較的聞く方に集中できたのではないかと感じている。			
<b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b> 学生同士のグループディスカッションなどが機能の面から難しかった。新しく機能が追加され、一つの会議室で少人数に分かれたディスカッションができるようになったので、有効に活用したい。			

科目名 障害児心理学	開講時期	秋学期	遠隔授業実施回数	14回
<b>授業形態</b> 講義 + 演習				
<p><b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b></p> <p>動画やホームページを自分で見られるように、classroom にリンク先に貼り付け、アクセスできるようにしたり、form で課題をさせたときに、全員の内容をすぐ確認できたりするところは便利だった。また、別科目で対面授業があったため、資料（弱視体験キット、ワークシート等）をその科目で配布し、オンラインの時にそれを使用して行うことができた。</p> <p>グループディスカッションは、秋学期の途中から追加された meet のアウトブレイクセッションの機能を使用して、対面による感染リスクがない状態で行うことができた。アウトブレイクセッションの機能に対応していない学生も少数いたが、メインの会議室でディスカッションを行うことができた。使用機器の回線速度等の関係で、アウトブレイクセッションに入れない学生もいたが、この学生もメインの会議室ではディスカッションを行うことができた。</p> <p>科目等履修生で事前に資料を取りに来ることができなかった学生について、資料を渡せない学生がいた。そのため、資料をスキャナに取り込み、それを classroom にアップすることで課題を行うことができた。突発的な事項にも、多様な対応方法を選択することができるのは強みである。</p>				
<p><b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b></p> <p>視覚障害の体験の中で、盲の体験についてはできなかった。例年では、盲者役の学生が目隠しをして、援助者役の学生が盲者役の学生の移動援助を体験したり、援助者役の学生が、盲者役の学生の机の上に筆記用具等を置き、どこに何があるのか分かりやすいように説明をさせたりしていた。しかし、今回はそれは取り組むことができなかった。聴覚障害の体験については、対面授業時に補講を入れた。このように実際に接触を必要とするロールプレイはできないことが多い。</p>				
<p><b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b></p> <p>できるだけ自分で学びを進められるように Classroom を活用した。課題に関連した記事を読む時には、複数あるホームページの中から興味のある内容を選択できるようにして、より意欲的に取り組めるようにした。</p> <p>授業内で使用した資料もいつでもアクセスできるように Classroom にアップした。</p> <p>春学期と同様に meet に入れない学生を確認するために、まずは classroom のコメント欄に学番を入力させてからリンクを貼ってある meet に入室するようにした。</p>				
<p><b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b></p> <p>グループディスカッションの時間を十分にとるために、課題の内容を精査する必要があると感じた。通常よりも会議室を移動したり、話し始めたりするのに時間がかかるためである。</p>				

科目名 体育講義	開講時期 春学期	遠隔授業実施回数 5回
<b>授業形態</b> 講義		
<b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b> 対面授業と異なり通学のための時間が必要ないためか、例年に比べて遅刻・欠席が少ないように感じた。また、Classroomに課題を提出させることで、提出状況や期限などの管理や、コメントの送受信などがし易いと感じた。学生への授業連絡についても、ユニバの掲示よりも配信の時間設定や資料の添付が容易であり、対面授業に変更後も連絡や課題提出の手段としてClassroomを使用している。特に、欠席学生への資料配信や課題の指示・管理に、今までにない手段で対応できるようになったことはプラスに感じている。		
<b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b> まず始めに、1年生なので顔と名前が一致せず、本人かどうかは実際にはわからないと感じながらの授業スタートであった。また、遅刻や課題の提出遅れ、質問への無回答に対し、多くの理由がネット環境の不具合であったが、環境が整っていない（スマホのみを使用している）学生が多いこと、真偽の確かめようがないことから注意ができなかった。 授業中は、環境が整っていない学生への配慮で、出席確認や発言時以外はカメラをオフにさせていたので、学生が考えたり書き写したりしている時間の過不足がつかみにくかった。そのため、プリントに書き込む内容を減らして随時確認しながら進めたものの、対面授業の机間巡視のように、直接見て作業の状況や理解度を確認・把握することは困難であった。 またVHSなどの比較的古い映像資料は、今回の遠隔授業では使用することができなかった。急に同等の内容の資料を用意することは難しく、時間を要した。 添付資料（PDFやWordファイル）については、問題なく利用できる学生とそうでない学生の格差が大きいと感じた。		
<b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b> 昨年度まではホワイトボードを使用して授業を進めていたが、板書をカメラで映す場合は光の加減の問題がある。そして内臓マイクとの距離が一定でないと声が届きにくいと考え、今年度はPowerPointを作成した。（これは対面授業になってからも、時間短縮への対応として続けた。） また、今までは学生の様子を「見て」時間配分や理解度を判断していたところ、学生に状況を細目に「聞く」ようにした。さらに、チャットで質問や問題発生を知らせる学生もいたため、質問に対してチャットで回答させるなど、意識的にチャットを使用する回数を増やししながら、都度チャットコメントを確認するようにした。 学生の集中力が途切れないように、またカメラオフ時の中抜け、居眠りを防止するために、質問を意識的に増やすようにした。		
<b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b> 従来授業で活用してきた教材（映像資料）を見直し、今後全ての映像資料をDVD化する、または購入するようにし、対面授業と遠隔授業で教材を変更しなくて良いように、随時準備を進めていきたい。 授業方法としては、今回は学生個人または指定学生に発言や回答させるしかできなかったが、現在はMeetの機能も拡充されてグループワークができるようなので、遠隔授業でも対面授業と同様のグループ討議、グループワークを実施したいと考えている。しかし新たな機能について、現時点では十分な理解ができていないので、今年度当初のように、教員間での試行期間が必要と考える。 短大部の学生は、遠隔授業をスマホのみで受講する学生が多数である等、学生の通信環境には差があり、一律の指導が難しい面もあるが、例年に比べて遅刻や提出遅れに対する意識の低下が顕著なので、どのような指導のあり方が現実的であり有効であるのか、予め科の教員間で協議しておきたい。		

科目名 幼児と表現Ⅱ	開講時期 春学期	遠隔授業実施回数 5回
<b>授業形態</b> 実技		
<b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b> 全国的に緊急事態宣言が発令され外出自粛が求められる中、直接友人と会う機会や身体を動かす機会は激減していた。そのような中、仲の良い友人とのLINEのやり取りだけでなく、クラスメイトや先生の顔を見て繋がる、大学と繋がることを欲していたことを強く感じた。また、共に身体を動かすことに喜びを感じていることが、対面授業時以上に感じる事ができた。これは、1年間の学生生活の中で、友人関係や教員との信頼関係が構築されていた、仲間と共に身体を動かすことの楽しさを実感している証であると感じた。		
<b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b> 実技なので、基本的にはカメラをオフの状態授業を進めることはできない。しかし学生のネット環境が様々で、全員が同時にカメラをオンにすることができず、交代しながらカメラをオンにさせていたので、計画していた授業内容が半減、或いは3分の1程度しかできなかった。また、本来はグループワークが多い内容であったが、当時のシステムではグループワークができず、個人でできる内容しかできなかった。 学生の受講場所によっては全身をカメラに映すことができず、身体の動き全体を把握しての指導はできなかった。また、動くためのスペースがほとんど無い学生もおり、ストレッチなどはベッドの上でしかできない学生もいた。動くスペースを確保するために家族との共有スペースで受講した学生もいたが、他の家族もオンラインで仕事や授業を受けていたためマイクをオフにする必要があったり、ミュートにしないとイケなかったり等、本人の学修に支障があるケースもあった。 音楽CDを使用する場合は、内臓マイクからステレオミキサーに切り替える必要があり、動いている途中で指示をしたり声をかけたりすることができなかった。また、昔の衛星放送のように動きと音にタイムラグがあり、学生の動きが実際に音楽、リズムに合っているのか判別できなかった。逆に、学生にも私の動きが音楽とズレて見えていたのだと思う。		
<b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b> ネット環境が弱い学生がいるため、カメラをオンにする（同時に動く）人数を色々調整した。しかし、少人数にしても画面が固まる学生がいたので、全員に支障のない状態を作ることは無理だと判断した。そこでオフにする（私からは見えない）学生が暇にならない程度の時間配分を重視し、クラスの半数に対して交代でカメラのオンオフを指示するようにした。また予め、「友人の動きを見る、一緒に動く」等、オフにしている間に行うことの指示をした。さらに、スペースの制限には理解を示しつつ、「もう少し〇〇できる？」等、具体的な言葉をかけることで、画面越しでも見られていると感じさせるように心がけた。 CDの音源を使用する場合は、マイクの切り替え作業を極力スピーディーに行い、学生の集中が途切れないように心がけた。また、途中の声掛け、指示ができないことから、伝える内容を精査して始めと終わりにまとめた。		
<b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b> 現状のシステム（Meetの機能）で、グループワークがどの程度可能かを、先ず見極めたい。そして実技の遠隔授業でもグループワークができるようにし、授業内容を減らすことなく計画通りに授業を実施したい。そのためには、何がどの程度実施可能であるのか、何ができないのかを、予め試行することで対応策を考えておきたい。 今年度当初は急なテレワーク、オンライン授業が始まったことで、また製造・流通の遅滞によって外付けマイクの購入が困難であった。今後、急な遠隔授業に対応できるように、そして、動きながらもマイクの位置を気にせず音量を安定させるために、ヘッドホンマイクを購入して備えたいと思う。		

科目名 基礎造形	開講時期 春学期	遠隔授業実施回数 5回
<b>授業形態</b> 実技		
<b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b> 遠隔授業では個人制作を余儀なくされたわけだが、誰かと一緒に作るよりも独自のアイデアが見られ、制作を楽しむことができた形跡が見られた。特に第2－3回パクパクパペットをつくろう！の課題では、郵送した画用紙だけでなく、自宅にある布などの素材も使った作品が見られ、学校で材料を持参させるより、また、友達としゃべりながら制作するより、面白いアイデアを生み出そうとする力が働いているようであった。 第4回景色に溶け込めカメレオン！では、カメレオンを溶け込ませる景色として、自宅の中や外も探したことで、学内で景色を探すよりもバラエティ豊かな作品となり、学校で掲示した際にはお互いの作品に興味深く鑑賞していた。		
<b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b> この授業が協同制作に力を入れた授業であるため、遠隔でそれができなくなったのは、いろいろと予定を変更し大変だった。また、作品の評価ではできた作品を写して提出させたが、写し方によってよりよく見せる方法もあり、実物との出来栄へのズレはあった。しかし、それは良い作品が悪く写っているパターンもある。		
<b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b> もともとは第1回から3回を使ってクラスごとに鯉のぼりをつくる活動を予定していたが、課題内容と予定表を新たに考えた。当初いつまで遠隔になるか分からなかったため、すべて個人制作になってしまうことも考えながら課題を決めていた。 対面になって第10－11回では、鯉のぼりを作る代わりに、クラスごとに鉛筆のみで4mのクジラを描く活動をした。これまで指導したことのない内容ではあったが、鉛筆のみという単純な材料の中に、いろいろな発見が見つかる活動になり、好評であった。		
<b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b> 遠隔授業においても協同的な活動から作品を生み出す楽しみを体験できるような課題ができると、革命的であると思う。		

科目名 言葉と表現	開講時期	春学期	遠隔授業実施回数	11回
<p><b>授業形態</b> 講義+実技</p>				
<p><b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b></p> <p>朗読の際、周囲を気にせずに、感情を込めて読める学生が多かった。また、対面形式の授業でやってもらっていると、大きな声を出せない学生も、モバイル機器に向かってだとしっかり読めているようであった。</p> <p>漢字の説明に動画を利用したため、全クラスに同じ内容の解説を行うことが出来た。対面式の授業で行っていると説明の一部を行わずに進めてしまう場合もあるため、クラスによるばらつきが無く同一の内容を提供出来たことは非常に良かった。また、動画はClassroomに貼り付けて、視聴時間を限って学習してもらったのであるが、何度も繰り返し見たい学生が居た際には、授業終了後そのまま資料として学生が利用出来た点も大変良かったと感じている。</p>				
<p><b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b></p> <p>漢字の小テストを実施した際に、学生達が前回の復習をしっかりしたうえで取り組んでいるかどうかが分からなかった。テストを行っている際にカメラをオンにしてもらったこともあるが、どの程度解答出来ているのかまでは、把握出来ない。得点をチャットに書き込んでもらったが、定期試験の出来具合とはかけ離れており、正しい得点を申告していたかどうか不明である。</p> <p>また、他の人が朗読をしている時、しっかり聴いて物語としても楽しんでくれた学生も居たが、指名すると必ず「どこからですか」と尋ねてくる学生もいた（大体同じ顔ぶれである）。Meetには入っていても、教室で受講しているようには、授業に向き合っていない姿勢が窺えた。</p> <p>対面式授業で、常に教員の目があるところで（ある程度強制力の働く場で）受講する際の姿とは異なり、学習するという姿勢が見えない学生もかなり居た。</p>				
<p><b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b></p> <p>漢字の確認テストの解答を、対面授業ではパワーポイントで示していたが、遠隔授業では動画にし、Classroomに貼り付けておいた。受講する側は、ダウンロードして視聴した方がモバイル機器への負担が少なく、また画面も安定しているとの感想を得ている。</p> <p>また、MeetとClassroomを何度か行き来しながら受講してもらうことで、中抜けしている可能性の高い学生を把握出来た。</p> <p>Meetを通してパワーポイントを提示している際、スクショする学生と、スクショせずに画面を見ながらノートを取る学生が居るため、画面を変更する時の「変えて良いですか」という確認を多くした。</p>				
<p><b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b></p> <p>確認テストへの解答方法を工夫して、復習した成果を測れるように考えるつもりである。</p> <p>チャットでの反応に即座に対応出来ないことがあった（話をしている時に見落としてしまったり、丁度のタイミングで回答出来なかったりした）ので、チャットそのものに慣れていかなければならない。</p> <p>学生のレスポンスまでの時間が、通信環境によって異なるという点を忘れないように心掛けたい。マイクやカメラをオンにしてもらう際に、学生の受講環境が全て見聞き出来るようになるため、事前に環境を整えるように声掛けをする必要がある。また、オンにしてもらうと、学生側の通信環境が一挙に悪くなるようなので、オンにしてもらう人数を工夫していきたい。また、人数を加減しつつ、オンにする学生を一定数作ることで、緊張感をもって受講してもらえようようにしたい。</p> <p>パソコンの内臓マイクを使用せずに、外付けマイクを利用した方が、聞き取りやすい音で授業を行っているようなので、今後は外付けマイクを使っていきたい。</p>				

科目名 幼児と健康Ⅱ（2年生）	開講時期 春学期	遠隔授業実施回数	6回
<p><b>授業形態</b></p> <p>授業形態は、講義と実技で実施した。「幼児と健康Ⅱ」ではアリーナ（体育館）での実技主体の授業であることから、前半（6回）の遠隔授業では学生が理解しやすいように、実践的な課題などは幼稚園や保育園の実際の動画を交えた方法で伝えていくように配慮した。</p>			
<p><b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b></p> <p>対面授業では、始めに教科書を使って進めていくスタイルを取っており、床に座って机のない状態で読み進める為、不安定であり、集中力も長くは続かない。しかし、遠隔授業では学生は机に向かって落ち着いた状態で教科書を読むことが出来ていた。また、毎回のレポート課題も教科書からの課題としたため、さらに理解を深めていた。履修生が2年生であり、1年間は対面授業を経験しているため教員との信頼関係や友達関係も築いていることから、1年生の授業よりも安心して遠隔授業ができた。</p>			
<p><b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b></p> <p>実技主体の授業である為、集団で行う「あそび」や「保育」とのつながりについてへの理解は困難であった。</p> <p>友だち同士で触れ合う楽しさや嬉しさを味わうことも困難である。また、実際に動いて活動することで、体力の使い方や力の調節など、汗することで理解することが出来ない。</p>			
<p><b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b></p> <p>教員が講義する際の「活舌」や「声質」、また「話す速さ」、さらに「顔の表情」など、対面授業の時よりも気を使って実施することができた。アリーナ（体育館）ではできなかった、幼稚園での「あそび」の実際の動画を学生に視聴してもらい、あそびの発展や自分なりの工夫などを具体的に考えてレポートしてもらうなど工夫することができた。コロナ禍の保育についても情報提供し、どのような保育やあそびが考えられるかをレポート課題とするなどして工夫した。</p>			
<p><b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b></p> <p>「あそび」や「保育」を考えるレポート課題については、時間配分もあるが、なるべく多くの学生にレポート内容を発表してもらうなど、学生からの発言を含め、応答性や活性化に結び付けた工夫をしたい。</p>			

科目名 音楽Ⅰ	開講時期 春学期	遠隔授業実施回数 6回
<p><b>授業形態</b> 講義・演習</p> <p><b>担当者</b> 専任教員，非常勤講師，非常勤助教，非常勤助手 合計9名</p>		
<p><b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b></p> <p>ピアノ個人レッスンについては，一人ひとりが画面での演奏をするため，教員から個人に意識が向けられていることを，かなり意識しているように思われた。</p> <p>理論の講義・演習については，楽理の記載を正確に理解することを指示し，それを画面上に提示することも求めていたため，集中して聞こうとする学生の様子が見られた。そこから自己の力で理解するというところへの意識が高まっていく様子があった。また教員同士の連携については，9名の教員同士の打ち合わせや，授業後の報告会が余裕を持って開けたことが通常授業との大きな差があった。これは日頃非常勤教員の勤務時間を超過しての会議は，心苦しいところが多々ある。しかし，通勤時間の省略ができるため，各教員から落ち着いた授業報告が行われたことは，チーム力を高められたように感じている。</p>		
<p><b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b></p> <p>ピアノ演奏，歌唱，といった実践の科目のため，音声，画面の on は必須である。画面上での実践は，開始された当初，それぞれのレベルに応じた上手な演奏に見え，歌唱力についても例年よりレベルが高い様子に見受けられた。しかし，マイクを通すということが本人の実力を曖昧なものにしており，教員の指導内容を混乱させる結果となっていった。</p> <p>また，感性という五感の域を含めた音楽的表現についてのイメージを画面上で伝えることは複雑で，音の幅などという言葉で伝えられないものの指導は困難を極めた。これらは教員たちの一致する意見として取り上げられている。そして，特に驚いた点については，ピアノ初心者についてである。ピアノという楽器の弾き方の基本的姿勢や座り方，また，楽器の置き方，椅子の高さなど，想像を越えたピアノ演奏への不具合を画面上で発見したのである。対面授業では，実際に教員の弾き姿や，ピアノという楽器の設置環境などを具体的に見て学ぶことができるため，自然と自宅でもそれに近づけていくことができる。しかし，今回は画面上にて初体験の学生は，床に座り込んで弾く姿やピアノ自体を床に置き，屈んだ姿勢で弾く状態を発見した。家庭の事情は勿論様々であるため中々それを改善させることは難しかったが，段ボール設置を進め，「その上に置いてみたら」などのアドバイスをするなど，レッスンの内容以前の指導に時間が必要となったことも大きなマイナス点であった。</p>		
<p><b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b></p> <p>学生が自宅でピアノ個人レッスンを受けるということは，家庭の様子が見えることとなる。特にピアノがリビングに設置してある例が多く，数回すると学生の不安な精神状態が見えてきた。例えば，夜勤明けの家族を気遣い，ピアノをイヤホンでしか弾けない，声をだすことはできないなどである。開始当初は，指導側からボリューム調整などを要求すると，学生も応じていたが，徐々に学生自身の不安定な様子が見えてきたため，その原因を探ることができた。その後は，授業前に家庭の状態を確認し，音量調節など家庭とのバランスを考えていくことに注意した。</p>		
<p><b>今後，同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b></p> <p>ピアノ個人レッスンについては，遠隔の実施は大変困難なものである。しかし，実施せざるをえない場合については，その事前の騒音についての家庭環境調査を詳細に実施したい。また，そのことから発生する学生の学びの速度への影響を想定し，画面上だからこそ有効な学びについての，個人プログラムを計画することが必要と考える。特に一年生については，姿勢や弾き方，ピアノ設置の基本的基準などのサンプル表示などを画面提示するなどの工夫をしていきたい。</p>		

科目名 保育実習指導Ⅰ（施設）＜2年＞	開講時期 春学期	遠隔授業実施回数	2回
授業形態 演習（実習指導）			
<p><b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b></p> <p>気軽に参加できるような気がする。通学の手間がなく、家のどこにいても授業が受けられるところが良いという学生がいた。ビデオの後日配信ができる。その一方で著作権の関係で配信できないものがある。</p>			
<p><b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b></p> <p>学生の表情、リアクションがわからない。最初の挨拶だけは顔出しを求めたところ顔を出したが、「ありがとうございます」と伝えるとすぐに閉じる学生が半数いた。</p> <p>ビデオの共有がうまくいかない、動きがカクカクになり、音声と画像のズレがあるといった課題があった。</p>			
<p><b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b></p> <p>リアクションを確認するため毎回感想文の提出を求めるとともに、リアルタイムでチャット（質問、意見）の記入を求めるとともに、受信状況が悪い学生がいることも配慮して、メールも活用した。</p>			
<p><b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b></p> <p>今回は、最初の2回だけ遠隔授業で残りが対面であった。</p> <p>実習記録の書き方、実習の心得は、対面で必要に応じて質問をリアルタイムで受け付けて行うことが相応しいと考えている。もし、遠隔授業を余儀なくされる場合、説明の具体性を持たせるために、実習記録の見本の画面表示、記入の実演提示等、視聴覚教材の充実を図りたいと考えている。</p>			

科目名 表現学（1年生）	開講時期 春学期	遠隔授業実施回数 6回
<p><b>授業形態</b></p> <p>授業形態については、講義と実技で実施した。「表現学」では和太鼓を使った実技主体の授業であることから、前半（6回）の遠隔授業では学生が理解しやすいように、実践的な課題などは動画を交えた方法で伝えていくように配慮した。</p>		
<p><b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b></p> <p>授業の目的や課題に対する説明を丁寧伝えられるよう、気を配りながら進めることに意識が向いた。</p> <p>また、レポート課題では学生自身で考えて調べる方法をとったことで、対面授業よりも深く学べる利点を感じた。動画（教師が制作した）を用いたレポート課題では、1週間の設定で学生が何度も視聴できるようにしたことで、授業外の好きな時間に進められることができた。毎回のレポート課題ではあるが、学生一人ひとりの習得の様子や問題意識などがよく分かり、次回の授業に反映することができた。</p>		
<p><b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b></p> <p>実技主体の授業の為、周りを感じたり、集団で音を合わせたり、強弱やテンポを感じて太鼓を演奏したりすることなどは、遠隔授業では困難であること。特に太鼓の生の音が体感できない。</p> <p>対面授業では学生に和太鼓を実際に試してたたいたり、徐々に慣れていくその様子を見て教員すぐさま助言・指導ができるが、遠隔では不可能であること。</p>		
<p><b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b></p> <p>教員が講義する際の「活舌」や「声質」、また「話す速さ」、さらに「顔の表情」など、対面授業の時よりも気を使って実施することができた。遠隔授業では机に向かって（椅子に座って）実施するので、教員自身が落ち着いて講義ができた。</p>		
<p><b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b></p> <p>学生の負担を考慮して、毎回のレポート課題の量をあまり多くしないで取り組めるような工夫は必要だと思われる。さらに質を落とさないような改善として、レポート課題だけでなく、感想等も記入してもらい、それらをフィードバックとして活用し、より応答性のある遠隔授業が提供できればと思う。</p> <p>今回、1年生の入学後初めての授業であることから、遠隔でも「教員」と「学生同士」がうち解けられるような雰囲気づくりへの工夫が必要だと考える。</p>		

科目名 保育のライフデザインⅡ	開講時期 春学期	遠隔授業実施回数	6回
<b>授業形態</b> 講義・演習			
<b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b> 二年生の初めということもあり、初回の授業は就職の今後についての取り組み方を具体的に示す内容から始まった。通常の授業態度から考えると、学生同士の意見交換などがすぐにできないためか、一人ひとりが聞き取る態度に、集中力がみられた。また、エプロンシアターの発表も第二回目の授業から実施したが、聴き取りにくい声や画面から、自分以外の学生の発表を観察しなくてはならないため、非常に慎重に仲間の発表を観察する姿がみられた。classroomによる、他の人の発表へのコメントも、中身が充実しており、特に良い点について多く感じる事が出来ていた。これらについては、画面一点集中ということがプラスの要素をもたらしていると思われる。また、携帯という機器に対する慣れがあるせいか、見せ方という点において、画面の取扱い（角度など）が個人を表現することに対面よりも上手に表現しているように感じられた。			
<b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b> ゼミ生全員のエプロンシアターの発表とプレゼンテーションを実施したが、携帯という画面の見せ方やマイクを通しての音量など、一見大変に充実しており、この世代のIT機器の発表の仕方に感心した。しかし、問題は実際にそれを対面で行ったとき、滑舌、音量、周りへの注意、見せ方など、機器を通しての伝え方と実際とが大きく異なる結果となった。つまり、人を意識してはいるものの、画面から隠せるところを上手く隠して発表できてしまうのである。このような自己満足が対面授業の時よりも大きいと感じる点があり、これは視聴する側にも演じる側にもあったと考えられる。 教員側からすると、このような形態が初めてのものであるためか、振り返ってみると、画面上で発言したり、表現したりすることに対して、どこか過大評価していたのではないかと危惧している。開始時期は学生も教員自身も心情的にマイナスであったことは過言ではなく、不安を抱えて始まったオンラインの学生の不慣れに同情する面が働いてしまうという部分がなかったとはいえない。これに対しては、冷静さを失っていたと思える部分もあると感じている。			
<b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b> 表現分野の発表を行う場合、すぐに意見交換や訂正、改善ができないということに注意が必要と感じた。特に音楽などの表現科目の場合、確実に作品として形跡を残せる制作などのものと違い、歌い方や話し方などの表現の記憶は曖昧なものとなるからである。特にこれについては、音声をオフにすることや、画面の凍結、時間のズレなども原因であろう。従って、最小限ではあるが、発表後にマイクを個々にオンにさせて一人ひとりへの確認、振り返りや意見を常に試みた。さらに微妙な表現の言い回しや、立ち振る舞い、声の抑揚などについて、できる限り教員が補足していく方法を取った。但しこれは、10名という少人数授業であったため実施できたといえる。			
<b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b> 今後遠隔授業を実施する場合は、画面上だからこそ見やすい、または確認しやすいこと、さらに周りの反応をすぐに感じる事が出来ない時間帯だからこそ実施できる内容を設定していきたい。対面の授業プログラムをそのまま実施することは不適切であると感じている。例えば個の表現が全体の表現の一つとして存在する活動など、ITの使用法に慣れている学生の特徴を生かし、個の時間を利用した取り組みが、相互に共有することで生まれる発表や表現実践方法を考えていきたい。その中では携帯機器を上手く利用できる学生ならではのアクティブラーニングや遠隔でこそ発揮できる協働性をいかした表現活動を学生自らプログラムすることも期待できると考えている。			

科目名 英語	開講時期 秋学期	遠隔授業実施回数	14回
授業形態 講義+実技			
<p><b>対面授業と違うという感じた点（プラス面）</b></p> <p>例年「英語」というだけで拒否感を示す学生が目立つのだが、教室で受講していないという気安さがあるのか、今年度は「英語は大嫌い」という声を耳にしていない。</p> <p>時間のロスを出るだけ少なくするために、学生を指名して解答してもらう場面を減らしており、学生にとっては、余計な心配なく受講出来ているようである。</p> <p>対面の授業だとなかなか質問しづらい場面であっても、チャットであれば質問しやすい感じているようである。特に、ワークの時間に入ると質問やリクエスト（資料をもう一度画面で見られるようにしてほしい）というコメントが寄せられることが、回数を重ねる毎に多くなってきている。</p>			
<p><b>対面授業と違うと感じた点（マイナス面）</b></p> <p>Mother Goose の中から1回の授業で2曲ずつ学習しているのだが、歌えているのかどうか判断出来ない。発音のチェックをするための口の動きを確認出来ない。</p> <p>別科目で対面授業があるため、遠隔授業での資料は出来るだけそちらの授業で配布しているのだが、欠席のために配布出来ない場合が多々あった。欠席者には次回の授業までにプリントを取りに来るように伝えてあるのだが、取りに来ない。資料をPDFファイルでClassroomにあげておいても、印刷出来ないと言って、配布資料無しで受講する学生が居る。</p> <p>対面授業で行っている時には、前回分の課題を次回の授業時間内にチェック出来るのだが、課題チェックのための別日程を設定する必要がある。また、すぐに使用するものであるため、提出当日に返却する必要があり、スケジュールが非常にタイトになっている。</p> <p>パワーポイントで提示した資料をスクショする学生と、手書きでノートを作成している学生とがあり、スライドの変更のタイミングが、対面授業の時よりも難しい。</p> <p>提示資料や使用する資料の変更等の指示に、対面授業よりもずっと多くの時間が必要であり、授業の進捗が大きく遅れている。その結果、課題の大幅な削減を余儀なくされている。</p> <p>また、解説の部分を省略して授業を進めてしまい、学生の理解へと繋がらないケースが多くなっている。</p>			
<p><b>対面授業実施の際と比べて工夫した点・気をつけた点等</b></p> <p>耳で聴いて内容を把握するという集中の仕方が難しい様子なので、EXERCISE の和訳分・文法事項の説明には、全てパワーポイントを使用している。</p> <p>Mother Goose の手遊び部分については、対面授業の一部の時間で確認するようにしている。</p> <p>別日程で提出してもらっている課題を、提出日当日中に返却出来るようにしている。</p>			
<p><b>今後、同一の科目で遠隔授業を実施する際に心掛ける点・改善する点等</b></p> <p>対面授業で予定していた授業内容を同じように実施出来ないという点が明らかになっているので、遠隔授業で実施する場合は、内容のスリム化を図りたい。</p> <p>授業資料を受け取れなかった場合、学生が自分で印刷出来るようにそのやり方を伝えておきたい。</p> <p>課題の提出・チェックの方法を、学生にとっても自分にとっても無理がないような形で設定出来るようにしたい。</p> <p>スクショによって授業内容を記録している学生の場合、対面授業において手書きでノートを取る時に比べて理解度が低下している。解答を含む資料の提示によって目で確認する部分と、話を聞きながら自分でノートを作る作業を組み合わせた授業の展開を目指したい。プリント集は、自分で書き込む箇所を設定しておいて、それをチェックしていくやり方への変更が必要かと思われる。</p>			

## V. 最後に

まとめとして、教員の振り返りから浮かび上がった遠隔授業の問題点を大別しておく。

①授業の構成・内容をどのようにするか、②学生の反応をどのように把握するか、③学生への課題の出し方、④教員サイドの遠隔授業システムへの習熟、⑤学生の実技発表の場面をいかに設定するか、⑥学生が受講している環境の把握、⑦真面目に取り組む学生とそうではない学生の受講態度及び成績の二極化をどのように防いでいくか、⑧学生の意見交換・発表の場を増やすための方策の検討、⑨学生に資料の扱い方を習熟させる方法等が挙げられる。

本稿では扱っていないが、同時期に幼児教育・保育科所属の学生に対しても遠隔授業に関するアンケート調査を実施したので、今後はその結果と併せて、教員にとっても学生にとっても満足度の高い遠隔授業に近づけるような実施体制を探っていきたい。